

## IV-4

当院多発性骨髓腫患者 100 名の染色体異常の頻度と予後

杉浦 勇、倉橋信悟、澤本晶代、足立達哉

豊橋市民病院

【目的】多発性骨髓腫 (MM) は異数染色体、14q32 を含む転座の有無によって異なる臨床経過と予後を示す。当院で過去 9 年間に診療した患者の染色体検査数が 100 名に達したので報告する。

【方法】MM・MGUS 患者について、G-バンド法と FISH 法にて骨髓の染色体異常の有無を検討した。FISH 法では、RB-1、p53、MLL1、IgH/BCL1 プローブにて各々 13q、17p、11q の数の異常および t(11;14) の有無を調べ、IgH/BCL1 で IgH 信号が増加する場合には、t(4;14)、t(14;16) の有無を追加検討した。13q 欠失、17p 欠失、t(11;14) の有無について、化学療法群、自家移植群で予後の差を検討した。

【結果】対象患者は 165 名で、うち 116 名に G-band 法を行ない 16 名 (13.8%) に異常を認めた。うち染色体過剰型は 5 名 (4.3%) であった。FISH 法で 13q、17p、11q に欠失を認めた症例は各々 33.3% (31/93)、12.0% (9/75)、5.2% (3/58) であった。11q では数の増加を 27.6% に認めた。t(11;14) を認めた症例は 13.8% (9/65) であり、t(4;14)、t(14;16)、t(8;14) を各々 3 名、1 名、1 名認めた。FISH 法による染色体異常の有無での治療による予後の差は、化学療法を行った 13q 欠失群だけに認めた ( $p=0.02$ )。

【結果】G-band 法での異常頻度は欧米の報告より低く、FISH 法では同等であった。一般検査センターを利用した FISH 法でも異常症例を把握できた。t(11;14) の有無を検討することで効率よく予後不良の t(4;14)、t(14;16) を持つ症例を診断できた。